



後句集

中村俊定文庫
文庫 18
284
1



松木半時菴



一此集元来叶信并一予頃年一

机下小庵後一予の信ありて別書
記して神書小可一を其後小登之梓
寸信て新古を二席て其粗布の裁
りそあを分ると以て其字を多れと
多々差多うらん人々人用推を加え
るべし人

一老浦の句人口小勝多すは其後て計由
へ〜今彫刻すは所 終り百

を以て著しは其子決るも他日
考定を乞ひて新案の句を
補して以後編を俟而已

皆延享三寅中秋之望

浪花書林

分外誌



淡々發句集春之部

辛酉之書



中一の内小田光之とて其を以て
本編トヒロニミテ
其物々々たるは留土の一紙
依保姫の甲いそたや少くはら

格府あり

咲きし所牡丹を以て相を阿多の云

を

くらのせや若とも思ふる山寺

春
探頭寄空州

神宗とてさるや 福壽の州まろ

肥遯之肥字明人換飛字半時庵
亦以非換飛と云ふハ平日何人と問ふ時
隱者と答ふことハ此點の隅也

今日買んむろこれ 宿乃 難賣換

山賊且

麓山のま腹小困左の神事

名のころのま腹小困左の神事
ま正月未まろ紙其 宿乃 難賣換

先おとふを乃ま風 宿乃 難賣換

下河系宿乃とま小困人

子人余其乃まろのほろ 難賣換
山椒ハ天下のま腹小困左の神事

系は 近路のまろ

極はろろま腹小困左の神事
叶ふま腹小困左の神事
草の飛をろ七舞乃 難賣換
宿乃 難賣換

寅のとき一昔を短く
武陽小長城むら

神事七廿一年 梅順菜

二度難波みく
花押とる

かくさねやさうくくさ山と六川の歌
さねよ明日神の事は忘乃梅

三年ゆふ

陸の子やさうくくと清津のそら
森かお麻く柳り鶴乃神事か
年踏んく裁き白山ゆり

あゑの一声言——神うけ

左春在元日

親さききせき平ゆりまのうき
麻とん八里阿形この神れま
風日海栄標るまをぬのそら
蟹節きうこぬ中端乃家れ春
春ハ知つて絶は乃あしむ神日歌

いふ草

二階くく目小梅へ事なま草か

快夜の吟

日よ候や帆を待は海流のそふ
やぬり

よき

蕙之ハ州の北日乃ゆふにむら

言水清雲を細ふ

渚雲をさるや一町とふさ

まよふのおま

協のわれ後とがるや岸こちり

石明寺を細

鼓

天の石明乃はくみや松を

梅

大般若殿を中へうり梅の花

髪小社をくし初冬や新くの梅

梅咲やうのい梅をくんま降る紙

目小遠はるハ門突 寂乃むを

栄揚る藤る流るや梅のをね

梅咲や流る店と 礼難者

おろふや去年むすねの梅れど

下北あろ人跡もくく垣乃梅

日洛外西ふ古妻登やむんの花

川北山路波のそ〜は毒れそふ

梅咲や出家ちの贈ふそ乃そ

むわさくや砥登り新端のそ

白梅や老りま〜るをち緒

聖小山に室を築くや梅乃そ

うくふその定宿ふうたむ江の

衣そ〜梅をく〜扉むめ乃そ

川 上の虹をふ眼や春をむ

甲斐源安二巻

易家お〜り整ふ年久〜梅の月

行南津忌右に江連吹堀を春

るふ尋のそ〜くふふを梅のそ

終奈をふ新板署〜梅乃そ

大坂

終を指船そふの江春をむ

祇園新詠

有梅戸板まうく 燈籠的 名中

仁右衛門の吟ニ奉

此かふ日小白を梅のしと鏡のふ

志くく と阿波へ入日中梅れふ

旋州亭

梅さくや 窓子 祖ハ 勢及乃 濃

題停年

森させぬや 峰乃 眉 志梅のふ

願聖殿寺

安を去ふ如花と 有系城未園紅

三考

登くくともハ 半ふら 尚有や 梅乃 花

三三三

晴ふや 一 暮七せう 一 七あくの 影

まの田中 扇く 半く 馬乃 尻

咲踊る 梅ま 暮 城ゆく 一 一 那

うくひと 中 岩を 透り ありの上

雪 中 一 あり小川 阿婆 一 暮り

山登り 平野みよ子

花寂 一 川より 坐 有 坂 有 梅

孝保七の月

伊丹夜神亭より 板交席あり

有系れ 魚と 願寺 一 暮り 暮乃 月

三三三

三三三

二月

そは切きうけく平新雪梅乃花

榎本大助神の子年忌

二月廿二日独吟一日千歳翁を詠

日冬西小一人立枝や千梅花

早雲

春は月河系ねとて冬冬まらう

述懐

待るをぬくま音滑の枝の形

吉原保元年の春雪晴山の後まはる庵を
まつゝの活より移るる河原の日量力未純然

こは小京ぬりとまらぬち終尾か

中村融言又十加美

梅海のや吉徳の中山十人己美

偶成

こはくたの日敷まくなり川河し
美雨

春雨や柳漕かろはきうま

仔細川

僻まはなかくてはえくくあくのむ

左美ふみく

監りや八角堂まおちるあ

吉原善善軒舎と号し時

蓋と所の二尺丸まやあ乃州

十左山和書より桂と
と梅より一とより小舟真

まらくはま乃使やあくまま

鳥杖路あり

黄梅小い梅路を介科の住居うね

雑子鳴や一雲の裂れぬら 不意そ

入瑤ふ一町〜一あり雑子の声

使老養老者そと小飛心蛙うも

二羽等風あり

はま〜のま着たまうやあゝの花

連翹乃小れ黄梅やきさ〜波

二月廿六日

吳曉子一口ふりふ

天満よきまをを合勢ん百千を

大口怒新又十の空

京田系松の路に
後松とあり

百年の藤を 後松 ありみ中う

平陽には氏八十八と記

振袖や 里ま中 形ふありとら

紀元四時のみ

あ草や 仔細の 田新まあり後

新防ふわう五人甲午年と
記すてはゆりし小招きとて

あ水きや 喜り梅や宿む〜玉

探頭古樹佐橋

霞や 喜り心 神音神 海〜神

二月の末

雨〜雪〜〜ん定りん大和路

小山独歩

山おろま 市原二の濠 三つ輪組

車坂みく

解堂の石横小 兼 中 鞍子箱

山碓

石阿ととら 龍と庭 寺 兼 中

鞍子みく

朽木 中 生きぬ先乃花の文

途中吟

おきく 中 宴みく 汲人峰 此花

おきくんと 辰とけ 花名 龍 兼 中

猿人 龍へ 帆と 兼 中 乃 兼 中

舟ふ日小 舟と 兼 中 神さく

軌 兼 中

兼 中 風ぬき 兼 中 兼 中

兼 中

兼 中 丸山寺 兼 中 兼 中

田ふより 兼 中 田分 兼 中 兼 中

兼 中

兼 中 百年 兼 中 兼 中

兼 中 一日の 兼 中 兼 中 兼 中

兼 中 兼 中 兼 中 兼 中

兼 中 兼 中 兼 中 兼 中

兼 中 兼 中 兼 中 兼 中

そろそろんれはゆきばくれは春梅

野丸のえ

神垣や根の家跡踏や皮さくら梅

春師の三月

九事や志うと春風と花事町

七産小ハナリと花事町と花の酒

かろ貝平浮立ふ乃 辰卯の梅

花山

酒噴さ橋とあまの春事 春乃の梅

あまの春事け花のそとけ 腐る家

茶海

旅人見よふを離るく 暁北月

雪乃 ぬく ぬく ぬく ぬく ぬく ぬく

まき野

菜の花名白ひハ亭 一 男山

菜花ふや洞へぬく ぬく ぬく ぬく

菜の花の世界へきふと 入口の南

上巳

割き鶏乃とつとつと 乾は鼠の梅

くま喉甲加田春休屋乃 桃乃花

飛鳥蓄ひるは膝 中 桃乃下

春事かさ野中 桃の 春後

かつき紙雑き——山うら
 とく婚をさうくそ何香桃の花
福田みく
 能書の尾れう（ふ雲ぬ）——桃乃ふ
 家ゆ中いふ飾——ぬるみみふ
 桃一本影目寺まら垣乃と端
時依
 桃のど鳴や佛——れ縁さうと
 昔来ぬ中伏見老か乃桃の花
 更科——名れ老と来う二うと
影寄枕衣
 川竹のう——ときぬは林のむ

右に辰谷ナニ系の中伏見桃り

探影 孤村

人んえに髪を味や垣乃と
紀陽の本一日午向き暮し戸録
 保川へ——千本老ふ人とのむ
涉江 一日小深き暮し戸録
 岩う中の 橋り——編む梅柳
 山伏も志は——は流す山柳——う那
 春さるる 海もさるる海平——柳か
 ふ家小岩り——かぬは柳ふ

探影 柳

中—ふこの車—久二歩門やふた
笠尾山中吟
古柳—吟や—暮家乃あり車—

二月吟

あくの日月や—糸文湯活立別れ

五南律海七十賀 又幸々之刊

糸を緋は—緋糸や法の花ころも

糸修あそび

風中—吟や—切糸のあみとり

考風巾乃—中小を愁や—貫ひ糸

菱乃花—軟乃息乃至形—のね

安井あそび

白菱の浪乃—庭あそび味吟—のふ

本懐

ふちの花か—ふ厚世や—踏の宵

影去意

二三人—走平人目や—ぬられふ

东海石

有柳—や—家乃—内なり友のむ

甲列歌沢より十余里

江陵ふ里一曰小吟のこころ

波乃浪—上よハ菱あそび—くねのお

松之川口

棹の—あ柳—のほろ—、解又きり

探題 老將花軍

春
桃小結く 乃 雷もまゐりさく

古州佐伯柗橋より金盃山の麓を
行くと河津の柗とそく

かつたのめぬを 咲ぬ神出さく

如月子風、老父之追悼

松も浦 山を月乃かきけが

極禱禱はみづかきけが

潭子 咲ぬ風ぬふさくさく

大正七月八日、不登ふまの白き

実多花

あかり 空も阿くぬく依のま

赤穂義士祈 文章のま

まゝ我 一色 富士の山さく

偶成

塩町の 山吹や 咲くは

林谷川あり

川乃 洲小 晒も 白や 梨乃花

具角一周忌

一幸乃 塚子 咲ぬ 雲のあ

日ナニ回忌

角乃 白少 欲かき 十色さても 利奈の花

日遠忌

柗柳 咲世も 孫も 咲くは

日ナニ回忌之百歳

定や 咲ぬの 二十口を 三川の酒

佃村小七十小女を尾あり

一白くとき志にききし

六の上乃まもむりしきかみ山

北混の赤木小うろくあをさる

連翻や馬あそを体うつ山

文補り又母様とみしきとまお同し日
は羅髪のもつりしき寄送の具形三月八日成
り流ハ雲のまを以て祝は

雪と後二うし山や一雪のそる

宇佐景秋

声ノくはえのけしーや摘のちり

日取あきし眺望

まの月や孫小僧あそ果のそ

玉あそあて

高生めいいで山吹れーはくふ

朱英彦氏の別業小松ふけ日雨うり或は晴う

池照るやー雨り我まら乃 蔭少

池は池ありし屋中ま彦氏あり
時ハ二月ころ

明のまか相根乃 烟あふ嵐山

まのまの家のまを約礎とぬーぬ

家花あふまをを 懐くんむしー家

上京船中にて吟

船既し 鴨くは 浪あふ 舟あけり事

花をさのいさあ

花ええし 林茶制 道乃むしし船

三月四日東大寺夜橋の下小松ふ

ふの月又 冥衣はいのちうら

二月廿二日 鳩屋男月俊人、牡丹尺不止看、文章を
略し、おまの二句「昨夜宿花裏通、鮮牡丹香と
つとを思ひ出さく」

秋ハ明く 柘子 蝶のめかひこのも

主秋村飛小つこ、こ絶入る小屯、教多とあふふ

海棠をち、つろり、櫂のこま、つら

大海棠ハ母の若く、つらう、こ絶あふふとあふふ

内又別登の、お水ハ川と福川

秋も又別 小虫 舟り、ま、このよみ

津、あふふ、あふふ、あふふ、あふふ、あふふ、あふふ

衣文、あふふ、あふふ、あふふ、あふふ、あふふ、あふふ

二月廿九日 文遊軒

世もよく 船中、あふふ、あふふ、あふふ、あふふ、あふふ

春行

四月廿二日、あふふ、あふふ、あふふ、あふふ、あふふ

春 及、あふふ、あふふ、あふふ、あふふ、あふふ、あふふ

二月廿

あふふ、あふふ、あふふ、あふふ、あふふ、あふふ、あふふ

二月廿八日、あふふ、あふふ、あふふ、あふふ、あふふ

あふふ、あふふ、あふふ、あふふ、あふふ、あふふ、あふふ

あふふ、あふふ、あふふ、あふふ、あふふ、あふふ、あふふ

清く夏夕集夏夕部

夏衣

月の芽も 暮経く山のさるもか
 さ垢離も人より衣もく 袷のちり
 うろよや 勝ゆんちり 衣のえ
 ぬけりや あいびの星れ 後路志は
 衣のえあ と水とのさういふ
ま国ちり〜 四月の初日はあま
 年回〜 けりや かせ乃 神袷
中山の〜 ちり

任者の後少く

けしハハ車——一輛ちくくおは

伴をふかす何人もおれぬ——杜宇

初春のついでに白のなほるな

卯の花ハち新ともかろくくくく多ハ

病後

埋く少くやまは——待と時を

ありむくや易機もかくやちくくきん

ぬしりふとと念新まきけ杜宇

約述は急きふ少くかちくくおは

玉河路西

杜宇を風乃風も今も肩

鶴路乃若もふなむ何ぞきん

又初春守て遠さね急路うか

かきき江津田も矢別をつぐおは

拾得もふみおは新春のね

田の時り

此は月二十日きやちくくおは

杜宇——け時そ三日乃ち

夢主人と抱ハる少くの新春か

庭お品奥

梅六つ まきまき 京乃 ぬきまきの家

貴館の末席お作り

愛竹 小のちり 北 糸戸 ぬきまき

呉邑小橋より斜日横山とて

酒ふがの川 千 碎 小日や 山よりま

箕面 飛流直下三千尺

浪乃 河 京お作り 夏あま

伴自追悼

八瀬四惠之域をすまぬ九佳名

折子みぬわうとら

梅子や 六 冊まきまき ぬきまき

よ竹

竹の子乃 ちりまきまき ぬきまき

紀三井寺 眺を布川の松み六を

漢帝を裁戸 千 舟 舟 月松

陸侯入川

是も亭 昔 空へ 梅子戸 月し女

日洲君 清茶掃り一時を

別 小 友 ねくまき 奥山 夢

伏陽水 鳴る水

まの藤 正の ちりまきまき 中水 花

けるこ 剪る ちりまきまき ぬきまき

梅子乃 親とまきまき ぬきまき 花

草茶のちりまきまき ぬきまき

南紀を光文お作り

草界くワの秋の備と月やえき

西宮遊記

このきこくをたはまの夜なりきり

に糸の穂なると

杖をけりし中ふり出せりきり

螢谷船中

掃上留くおやあそぶの花とみち

大黒ちり二倍紙久は田植の事

富てをりし一葉しりて雨時以心裏放す

おれの翁乃うたをうらやむ毎うね

泉南止宿之吟

涼しさをけいしそのまれをうらやむ

早秋一日ふくたつ花園かき其行と
中野小山田の麻の麻をえも

ねとろくはかきよあね非情は

和衣浦ま蓋物小たふ時ふ夕陽

色をりし入田のかうらうらも

草田茶をめく

さかきしおさるやみ花をり水

顔板性

故とやや廬なりむすぬ州の店

きねの庵あり

山神の小使清し一降のこゑ

かきあや

言は輝し芝の上りあきま

任より法よ

美の陽ふをまはしきや一は白登

探歌まをる少志

うしふいゝあきとくく北園のてん

昔も新州をふたふり

候をそめんとせんくもねふりさか

昔も家出の時

あうい阿きとてふ炊やはな乃月

右より少水よりい老ぬとまーとと

由井の候ゆ

復州や塩家津いほお新地を

釣り人小鵬並ふ花屋のわ

身延のつ

輝一輝 所の経あり乃る

七向小のち

涼一ふや 高さ三人富士まら雪

巻き七面用帳

晴吹や一まらうより清くをぬのそ

同辰日月

七峰 まら新 もあう月 まささうね

山本の宿よりまらあ

城小麻をねはくく 源源の山極

六月七日苗本の峰を山何家取てふ入路よとて
七月の陽う釣りくちくまの橋上より
いさねより風情かくり

山洋一や海同お路一の入部一

入道言を興

負しこまら 己能悟む所のさう

同くさるい

涼しき乃 扇をひきまらう 松乃る

同

逆さぬふりきりて 花を踊りうね

馬上より おろたを所 ぬきんて

明里乃 扇をむくまらう ちと

同

春もよほ 咲や 口乃 桐のさ

一字歌 意

夏もよほ 向ふき 雪えとら 楓

そりとせぬ世乃 付や 一宅のま

敲く秋小生 ぬきんて 扇をひきまらう

言ぬき

滝の樋を系をくまらう 一とら せん

六月七日の吟

斗烟乃 七夕はをや 神とら みる

同八日吟

せしきり 不きき 扇をひきまらう 扇

夕立

ふ雨乃 せしきり 中 楠子の暮れ せし

中よ ところの射割て 咲や 扇乃 玉

夏交を日塔の河を舟中へ

六月の朝を經極。漕舟を以

日附他舟三舟あり

今日より始凍し。たせハ人乃舟

六月十六日

板舟をうごかし。月の高見え舟

を止宿

舟もや。凍り乃。穴を朝日山

祇園

林雲。山へ入るまゝ

舟もや。正哉。嵐を板舟

六月廿二日之秋。十六日。天満宮林雲之所。佐所。旅所。小舟あり

夏と秋の邊り。舟を以。漕舟。板舟

東村
川
畑

